

■論文題目	地域社会におけるナマハゲ行事の継承と変容—行事の価値と認識の形成過程—		
■氏名(学籍番号)	船橋 美由(0412020086)		
■指導教員	平井 勇介	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	伝統行事	地域のアイデンティティ	文化保存

1. 研究背景と目的

秋田県男鹿市の「男鹿のナマハゲ」は秋田県を代表する伝統行事であり、国の重要無形文化財に指定され、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている。この行事は大晦日の夜に行われ、男鹿の各地区でケデや仮面を身に纏った青年たちがナマハゲに扮し家々を訪れる独自の来訪神行事である。その独特な儀式と風習が地域社会にとって重要なアイデンティティを形成してきた。

しかしながら、少子高齢化や過疎化が進み、地域の人口減少とともに若い世代の担い手が不足している。これにより行事の継承が脅かされ、地域の伝統が失われる可能性が高まっている。イベントや再現行事などの観光資源としてのナマハゲが注目を集めているが、本来の性格を持つナマハゲ行事は主に地域内で行われ、秘匿性が高いため、外部からの理解や参加が難しい状況がある。

本稿では先行研究も踏まえて筆者が住み続けた地域での伝統行事の変遷を明らかにするとともに、現在の行事における継承の課題を明らかにする。

2. 先行研究からみるナマハゲ行事の変遷

「男鹿のナマハゲ」の起源や変遷について整理する。まず、江戸時代に旅行家の菅江真澄の「男鹿の寒風」が最古の記録である。近代以降のナマハゲ行事の発見や普及過程については八木（2009）の研究を参考にしている。明治大正期には奇習として報告され、昭和初期には柳田國男や折口信夫によって捉えられ、その後、第二次大戦後には多くの研究が積み重ねられ、山伏修験道説や漢の武帝説などの起源伝承についての研究が行われている。柳田國男は近代のナマハゲが既に衰えていたことを指摘し、信仰に基づいた伝統や文化のそのままの価値を重視しているような主張をしている。一方、折口信夫は柳田の言う「年の神」に「まれびと」の解釈を加え、その祖霊的な性格を強調した。

その後、観光資源としてのナマハゲが注目され、メディアや観光行事を通じて全国に普及していく過程が明らかにされている。特に、鉄道省によるツーリズムの振興が大きな役割を果たした。昭和39年には「なまはげ柴灯まつり」が開催され、平成8年には「なまはげ館」と「男鹿真山伝承館」が開館し、ナマハゲが観光資源として商品化された。

現在の男鹿のナマハゲ行事の実施状況については、ナマハゲ保存継承協議会の調査報告書に基づき、男鹿市内全148町内会のうち平成27年度は79町内、令和元年は89町内の実施数である。また新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度の実施状況が大きく変動し、多くの行事が中止されたことが示された。

向かい入れる家側の変化に着目すると、初期は豊穰や無病息災を祈る儀式として、向かい入れる家はナマハゲによる神聖な存在としての期待に応え、酒や料理を用意していた。ナマハゲ保存継承協議会の報告書に記録された小林の講話によれば、これは稲作が生業として成り立っていた時代における祭礼行事の一環であり、農業との結びつきが強調されていた。しかし、澁谷（2000）は、高度経済成長期以降の環境変化が伝統行事にも影響を与えており、共同活動の減少や家族形態の変化が向かい入れる家の減少を招いている、と指摘する。これがナマハゲの来訪や問答の減少に繋がり、行事の本質が変容し、伝統の存続が脅かされている可能性が浮かび上がった。

3. 聞き取り調査からみるナマハゲ行事の変遷

先行研究において、近代化や観光化によるナマハゲの変容をみてきた。次に、筆者の生まれ育った男鹿市東部に位置する福川地区（令和元年3月31日現在の世帯数は94、人口は247人）を対象に、地域行事と

してのナマハゲの変遷について整理した。ここで用いている資料は、男鹿のナマハゲ保存継承協議会（2021）の資料とナマハゲ役を務めてきた筆者の父親へのインタビュー資料である。

ナマハゲ保存継承協議会の資料を整理すると、昭和 52 年から令和元年にかけて福川地区のナマハゲ行事の形態は主に次のような変化があった。実施団体は、青年会主催から町内会組織へと変更され、面は地域住民が制作した杉面やザル面から昔のものも使用しつつ木彫りの面が主となっている。ナマハゲは 4 人 1 組が 2 グループいたが、3 人 2 組となっている。また父への聞き取りから 50 軒の家がナマハゲを受け入れていたが、令和元年にはその数が 7 軒に減少していることが分かった。

さらに、担い手であった父にナマハゲ行事に対する意識の変容について尋ねると、成人前の活動としての「餅持ち」の経験や、青年時代における「ケラ編み」など、行事の見習いとして参加し伝統や慣習に触れる機会があったことが分かった。またナマハゲとしての役割を果たす中で、礼儀正しい態度や行動を通じて家庭や地域に神秘的で神聖なものとして認識され、父自身も成長と自覚を得る過程が浮かび上がった。

地域社会における行事の影響について質問すると、行事が地域社会において住民同士のコミュニケーション、昔から受け継がれた精神性、教養・教育を果たす重要なものであると示唆された。

最後に、行事への参加状況やその背後にある課題に焦点を当て、父が語る地域全体の継承への取り組みや、行事への参加が個人の自由として重視される傾向について考察した。調査結果から、ナマハゲ行事の受け入れ側と実行側との認識の違いが継承の難しさにつながっていると示された。

4. 地域行事の継承に関する課題

「男鹿のナマハゲ」はその独自性と歴史的な背景から地域社会において重要なアイデンティティを形成してきた一方、近年の変遷を辿ると行事の持続性にはいくつかの課題が見えてきた。まず、少子高齢化や過疎化に伴い、若い世代の参加不足が顕著となっている。次に、行事の本来の性格と観光資源としての側面のバランスが問題視され、伝統の維持と外部からの理解促進の難しさがある。最後に向かい入れる家の減少や生活スタイルの変化など地域社会の変化により、伝統行事としての意味や価値が共有されにくくなっている。

5. 結論

ナマハゲ行事は歴史を通じて衰えつつも、社会の変容に適応し、その内容を変えながらも継承されてきた。調査を通じて、行事に携わる側の認識が明らかになった。携わる者たちは準備過程から住民同士の交流と連帯感の醸成を図りながら、地域のナマハゲとしての役割を認識し、来訪神としての振る舞い方に責任を持ち、問答を通じて伝統的な精神性を共有していることが重要であると分かった。

一方、継承に関する課題に対しては、ナマハゲ行事が変容と共に簡略化したり、言動や各家への配慮を細かく変えたりしていくだけでなく、受け入れ側からも地域で継承してきた行事の本質を理解する試みが必要である。各地区によって行事のありようは異なり、外部からナマハゲのイメージを自覚しつつも、各地区独自のアイデンティティを構築している。今後の展望としてはそれぞれのナマハゲ役はナマハゲに自らの振る舞いや礼節を込め、受け入れ側はその存在に宿る神を見つめ、行事を再構築していくことではないか。

【主な参考文献】

- ・ 澁谷美紀,「伝統行事の伝承と地域活性化―岩手県北上市 SN 集落の小正月行事の事例を中心に―」,村落社会研究,6 卷 2 号,2000 年,48―59 頁
- ・ 八木康幸,「近代における民族文化の発見とその知識、情報の普及過程：男鹿のナマハゲを事例として」,『関西学院史学』36 号,2009 年,79―118 頁
- ・ 男鹿のナマハゲ保存継承協議会,「ユネスコ無形文化遺産 重要無形民俗文化財 男鹿のナマハゲ―実施状況調査報告書」,秋田協同印刷株式会社,2021 年